

35、PMDの知能に関する研究

— ITPAによる検討 —

国立療養所八雲病院

桜田 裕 大友 政明

藤島 慎一

PMD、D型児の知能は、一般児より総合的に低く、言語性IQが動作性IQより低いことが指摘されています。そこで、我々は、ITPA言語学習能力診断検査（以下ITPAという）を用い、D型の言語性IQの遅れがどこに起因しているかについて検討したので報告します。対象は、当院入院患児D型4名で年齢6才～8才を対象としました。

なお、表のCA得点をPLAと訂正します。

表1 表象水準得点

表1は、表象水準（この水準は、意味を伝える言語シンボルを扱うより高度な媒介過程を使用する行動）得点を見たもので、表の通り、聴覚一視覚受容はどの対象を見ても評価点平均値（以下SS平均値という）から+8以内の境界線内にありますが共通して高くなっています。表象水準総合的には下位検査評価点（以下下位検査SSという）がK・Y35、T・Y22、H・I32、T・T28に対しSS平均値は33、22、32、29とSS平均値±6の範囲内にあり有意差はない。次に、

表象水準	K・Y		T・Y		H・I		T・T	
	CA得点	評価点	CA得点	評価点	CA得点	評価点	CA得点	評価点
聴覚受容	9-1	38	7-1	28	7-6	39	7-1	34
視覚受容	9-10	41	7-1	31	5-7	31	6-8	33
聴覚適合	9-7	38	4-9	10	6-9	35	8-1	39
視覚適合	8-2	35	4-6	10	5-5	27	5-10	28
聴覚表現	6-5	31	6-8	32	3-4	24	4-2	24
視覚表現	6-0	28	4-5	21	6-0	34	0	10
平均値	8-4	35	5-9	22	5-9	32	5-4	28
SS平均値		33		22		32		29

(表1)

表2は、自動水準（この水準は、習慣により強く組織化され、あまり意識しなくても反応が自動的に行なわれる水準）得点を見たもので、構成・記憶を見ても下位検査SSに対し、どの対象を見てもSS平均値±6の範囲内にあり、有意差はない。表象水準と自動水準との間にも有意差はなかった。次に

表2 自動水準得点

自動水準	K・Y		T・Y		H・I		T・T	
	CA得点	評価点	CA得点	評価点	CA得点	評価点	CA得点	評価点
文法構成	6-5	29	3-11	8	4-9	24	6-2	31
視覚構成	8-4	35	7-9	33	4-10	26	8-9	41
聴覚記憶	6-6	29	4-0	22	9-2	44	4-0	25
視覚記憶	5-6	28	4-8	23	6-4	35	5-3	29
平均値	6-8	30	5-1	22	6-3	32	6-0	32
SS平均値		33		22		32		29

(表2)

表3は、聴覚一音声回路（この回路は目を通して入ってきた感覚的印象を受けとめ言葉で反応を表現する通路）得点を見たものです。ここでも下位検査SSに対し、どの対象もSS平均値±6の範囲内にあり有意差は見られない。次に、

表3 聴覚一音声回路得点

聴覚一音声回路	K・Y		T・Y		H・I		T・T	
	CA得点	評価点	CA得点	評価点	CA得点	評価点	CA得点	評価点
聴覚受容	9-1	38	7-1	28	7-6	39	7-1	34
聴覚適合	9-7	38	4-9	10	6-9	35	8-1	39
言語表現	6-5	31	6-8	32	3-4	24	4-2	24
文法構成	6-5	29	3-11	8	4-9	24	6-2	31
聴覚記憶	6-6	29	4-0	22	9-2	44	4-0	25
平均値	7-7	33	5-3	20	6-4	33	5-1	31
SS平均値		33		22		32		29

(表3)

表4は、視覚一運動回路（この回路は、目を通して

入ってきた感覚的印象を受けとめ、身振りや動作で反応を表現する通路) 得点を見たものです。聴覚一音声回路と同様に下位検査SSに対し、SS平均値±6の範囲内にあり有意差は見られません。又聴覚一音声回路と視覚一運動回路との間においても有意差は見られませんでした。

次に表5は、心理・言語過程得点を見たものです。受容過程においては、どの対象を見ても有意差はないが、下位検査SS平均値よりも+3~+8の得点を示しており、受容過程における問題はないと思われます。

連合過程では、T・YはSS平均値22に比べ聴覚一視覚連合が共に10とそれぞれ-12ずれておりこの部分では能力が落ち込んでいる傾向がある。表現過程ではT・Tは下位検査SSが17とSS平均値から-12ずれており有意差がある。又過程間の差についても、T・Yは連合過程が受容、表現過程に比べ-17~20低く、T・T、K・Yも表現過程で同様の傾向が見られた。

表6では、特にPLA(言語年齢)を見ると、全般に歴年齢に対し低い傾向が見られ症例は少ないがWISCの検査結果に見られる低言語性IQと共通していると思われる。

今回、対象も少なくD型の特徴的傾向を得ることができませんでしたが、多少なりとも過程間に差が見られたこと、あるいは精神遅滞児では、表象水準に比べ自動水準が劣るという点で1例(IQ66児)であるが、そのような傾向が見られなかったことなどから、今後さらにデータを増すことで何らかの傾向が得られると思われる。

表4 視覚一運動回路得点

視覚一運動回路	K.Y		T.Y		H.I		T.T	
	CA得点	PLQ得点	CA得点	PLQ得点	CA得点	PLQ得点	CA得点	PLQ得点
視覚受容	9-10	41	7-11	31	5-7	31	6-8	30
視覚連合	8-2	35	4-6	10	5-5	27	5-10	28
動作表現	6-0	28	4-5	21	6-0	34	0	10
視覚構成	8-4	35	7-9	33	4-10	26	8-9	41
視覚記憶	5-6	28	4-8	23	6-4	35	5-3	29
平均値	7-7	30	5-8	24	5-8	31	5-2	28
SS平均値				22				29

(表4)

表5 心理・言語過程得点

心理・言語過程	K.Y		T.Y		H.I		T.T					
	PLA	PLQ	PLA	PLQ	PLA	PLQ	PLA	PLQ				
受容	9-6	107	40	7-11	81	30	6-7	98	35	6-11	94	34
連合	8-10	99	37	4-8	53	10	6-1	90	31	7-0	95	34
表現	6-3	70	30	5-7	64	27	4-8	69	29	2-1	28	17
SS平均値			30		22		32				29	

(表5)

表6 個人評価得点

	CA	歴年齢	PLA	PLQ	IQ	PLA	PLQ
K.Y	8-11	8-6	95	114	7-5	82	
T.Y	8-9	5-9	66	66	5-2	61	
H.I	6-9	6-6	96	94	5-10	89	
T.T	7-4	6-2	84	86	5-8	77	

(表6)

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

PMD、D型児の知能は、一般児より総合的に低く言語性IQが動作性IQより低いことが指摘されています。そこで、我々は、ITPA 言語学習能力診断検査(以下ITPAという)を用い、D型の言語性IQの遅れがどこに起因しているかについて検討したので報告します。

対象は、当院入院患児D型4名で年令6才~8才を対象としました。